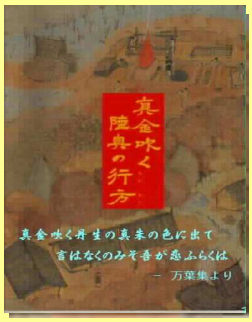
4.　7世紀　畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫「行方製鉄」遺跡を訪ねる

福島県原町市　金沢製鉄遺跡

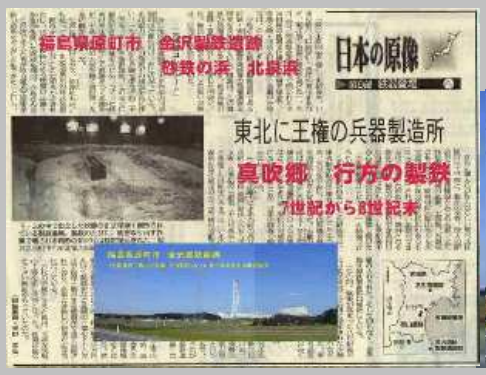
1999.11.13. hrmci.htm　by Mutsuo Nakanishi



4.1.　7世紀　畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫「行方製鉄」遺跡を訪ねる
4.2.　ヒタカミ「日高見(北上)」の鬼 蝦夷（エミシ）の雄アテルイ
4.3.　8世紀　蝦夷と戦った畿内王権の前線基地「多 賀 城 遺　跡」

4. 1.　7世紀　畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫　「行方製鉄」遺跡を訪ねる

福島県 原町　金 沢 製 鉄 遺 跡



朝日新聞　「日本の原像」の記事　福島県原町市金沢製鉄遺跡とその上に建つ発電所

今日は　久しぶりに家内と二人　昼の常磐線　快晴の空に映える太平洋の海を眺めました。　朝日新聞大阪版夕刊に「日本の現像　―鉄器登場―」が連載され、福島県原町市に「日本誕生」にかかわった大規模な製鉄遺跡の有った事を知り、日立にいる姉を訪ねがてら家内と二人で出掛けた。

東京から常磐線の特急で約4時間。日立から太平洋を眺めながら、勿来・常磐を過ぎて福島県にはいり、山間から東に太平洋　西に阿武隈山地を望む盆地にはいる。

「相馬馬追い祭り」で有名な相馬盆地の中心に原町市がある。

この原町市の北の外れ相馬市に隣接した金沢地区の太平洋に面した丘陵から、東日本最大の製鉄遺跡群が出土した。

7世紀後半の奈良時代　日本統一へ向けて、坂上田村麻呂ほか東北征伐が行われたが、その兵器製造所

として武器製造の拠点として　日本統一に重要な役割を果たした「陸奥の国　真吹郷　行方の製鉄」である。
遺跡は東北電力の原町発電所の中にあり、連絡もとらずふらっと出掛けた為残念ながら中に入れず。
発電所の建っている外から遺跡群のある丘の周辺を歩きね眺めてきました。
発電所の建設により、海岸周辺は良く整備された美しい静かな公園となっていた。太平洋とはるか遠くをゆく船をまた日の出を見るには絶好のポイント。太平洋に面してこの遺跡の上に建つ、東北電力原町発電所とそれに隣接して太平洋の荒波に洗われる海岸北泉海浜公園　砂鉄の海岸で遊んで帰りました。

後日東北電力　原町発電所の石田純一氏より、丁重なお手紙とともにこの製鉄遺跡発掘の記録資料やビデオまた　鈴木啓氏「宇多・行方の製鉄をめぐって」等多くの貴重な資料を送っていただいた。

1. 金沢沢製鉄遺跡　東北電力　原町発電所　資料より
2. 金沢製鉄遺跡の特徴
3. 砂鉄の舞う浜　北泉浜　　福島県原町市北泉海浜公園
4. 北泉浜で　浜砂鉄が描く模様
5. 「iron Road 鉄の道」

朝日新聞　「日本の原像」より

日本の原像

第9部 鉄器登場 ⑥

東北に王権の兵器製造所

「鉄の生産開始を機に七世紀後半、いまの仙台市以南がいっきに均質化するなど、東北地方南部は激変を遂げた」。今月三日、福島県会津若松市で開かれた全国組織の鉄器文化研究会の研究集会で、寺島文隆・同県文化センター遠瀬戸分室長は、こう講演した。

寺島さんは日本最大の製鉄遺跡である同県・金沢地区製鉄遺跡群の発掘調査と研究を長年続けている。講演は、この遺跡の発掘成果にとどまらず、東北各地の遺跡・遺物も総合して分析した内容だった。優れた業績を基盤にした鋭い見解は、研究者らの注目を集めた。

「大規模コンビナート」

金沢地区製鉄遺跡群は太平洋岸の同県原町市と鹿島町の一部に広がっている。東北電力原町火力発電所の建設計画に伴い、一九八九年から丘陵地帯など約二千二万五千平方㍍を発掘調査。これまでに製鉄炉百二十三基をはじめ、つくった鉄素材を加熱、加工して鉄器をつくる鍛冶炉二十基、燃料の木炭を焼く窯百四十九基の跡が見つかった。

生産に伴って出るガス、鉄滓約七百㌧も残っていた。また送風用の新式装置「踏みふいご」も、ここで明らかにされたし、渡来の技術による硬質の土器・須恵器を焼いた窯跡も判明。寺島さんは「この地で先人たちが取り組んだ技術革新の跡をたどることもできた」という。

ドームの中で出土した状態のまま保存・展示されている製鉄遺構。製鉄のたびに、鉄を取り出す作業で壊される箱形の炉だけは想定復元された＝福島県原町市の東北電力原町火力発電所内で

さらに職人らが住んだらしい竪穴式住居百三十三棟と、製品の保管、役人の詰め所などの管理施設とみられる掘っ立て柱建物二十九棟の遺構、土器類、木器なども分かった。原料は阿武隈山地から川で運ばれ、太平洋の荒波に洗われるうちに「自然選鉱」され、ぶ厚い地層ができるほど積もった砂鉄だった。燃料となる豊富な森林、輸送の船が停泊できる河口の自然の港などにも恵まれ、七世紀後半から二百年余りにわたって操業し続けた「大規模製鉄コンビナート」と結論づけられた。

ここで製鉄が始まった七世紀後半は、律令制が軌道に乗り始めたころに当たる。天皇を中心に、法と行政組織を整え全国統治をめざす政治体制だ。王権の拠点はすでにとのころ、古川市・名生館、仙台市・郡山両遺跡の役所のような遺構などで知られるように、現在の宮城県内に及んでいたことが、近年の調査で明らかになっている。

一方、阿倍比羅夫による当時の異なる政治・文化の民「蝦夷」討伐（六五八年）以後、八世紀の「蝦夷三十八年戦争」などを経て九世紀中ごろまでに、いまの青森県を除く東北の大半が王権の支配下に組み入れられた。そして間もなく、金沢地区製鉄遺跡群は廃絶している。

「この間、緊張が高まった八世紀後半には鉄が通常の三倍ほど増産された形跡がある。戦いに必要な刀剣、やじりなど鉄の武器類を、主にここでつくった。事態が沈静化に向かうと武器はあまり必要でなくなったようだ」と寺島さんはみている。

ドーム方式で保存・展示

『日本書紀』が十二代とする景行天皇の皇子、日本武尊の「蝦夷東征」伝承に、興味深い物語が紹介されている。船首に大鏡を取りつけた船で、蝦夷勢力との境界まで北上した時、尊の容姿と軍勢の威勢を恐れた蝦夷が服従したというのだ。その境界は竹水門という地名で、原町市付近にあった多珂郡だという説がある。この「英雄伝説」には、同製鉄遺跡群あたりが一時、「対決の最前線」だった可能性が秘められている。

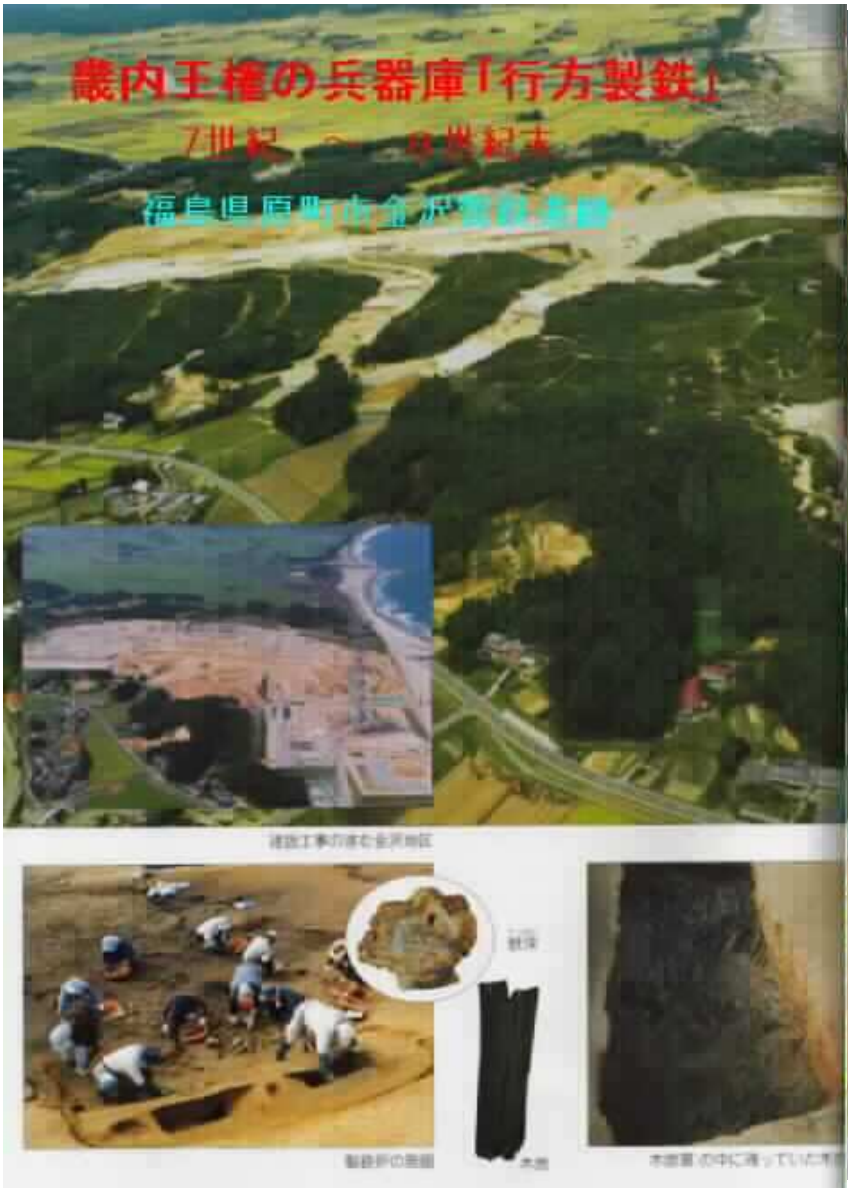
時代とともに隆盛し、廃れた「王権の兵器コンビナート」。関連分を含め、調査はことし三月に一応終わった。さらに近く、発電所の施設に関連する隣接地域での発掘調査が再開される予定。そこにも遺跡が眠っている見込みだという。発電所の敷地内には今春、約一億五千万円かけて製鉄炉など遺跡の一部をドーム方式で保存・展示する施設ができて公開されており、企業には珍しい決断だと評判になっている。

古代の王権を支えた鉄は、大半が実戦の主役を担う武器になった。鉄器は血なまぐさい側面をもっていたのだ。

（編集委員・天野　幸弘）

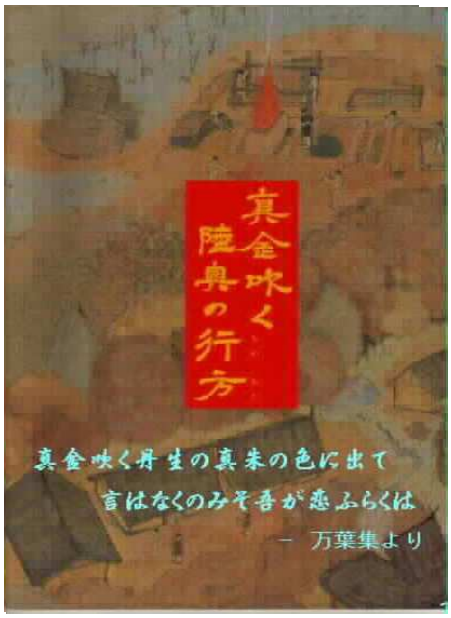
1.　金 沢 製 鉄 遺 跡

東北電力　原町発電所　資料より



万葉集 14 巻 3560 首

「真金吹く丹生の真朱の色に出て
言はなくのみそ吾が恋ふらくは」



●　8 世紀蝦夷征伐と行方製鉄遺跡

「たたら」遺跡の多くが山深い奥地の谷あいにあるのに対し、この金沢地区製鉄遺跡群は海岸に面した丘陵にある。すぐそばに背後の阿武隈山地から流れ出て、太平洋の荒波に洗われ、堆積した浜砂鉄の宝庫　泉・北泉の浜がある。

この明るい丘陵の谷間に 7 世紀から 8 世紀末にかけ、大規模な製鉄炉や鍛冶炉・炭焼き炉など数々の製鉄鍛冶が営まれた。

当時　奈良時代　畿内王権が着々と日本を統一をめざし、その勢力を東北にまで拡大、蝦夷征伐を盛んに行っていた。

この行方製鉄はその「王権の兵器庫」として重要な役割を果たした。

坂上田村麻呂の蝦夷征伐により　蝦夷勢力が討ち果たされ、胆沢城（現在の一関市）が築かれ、東北が平定されると兵器の需要の低下とともにこの行方製鉄も衰退してゆく。

万葉集 14 巻 3560 首

「真金吹く 丹生の真朱の色に出て

言はなく のみそ吾が恋ふらく は」

この歌は原町市金沢の「真吹郷　行方製鉄」を歌ったものであると鈴木啓氏は述べている。
万葉集に読まれるほどの有名な大規模な製鉄所であった事がしのばれる。

「宇多・行方の製鉄をめぐって」より

2. 金沢製鉄遺跡の特徴

石田氏からいただいた資料によるこの遺跡の全盛期 たたら炉は縦型炉から箱型炉に進化し、踏み鞴を有していることに特徴があり、その踏み鞴のあとが完全な形で出土している。
この踏み鞴の採用により、製鉄量は大幅に増大したことは想像に難くない。
この踏み鞴を持つ箱型炉が全国へ波及して行き、時代が下るに従って天秤鞴を持つ大規模なたたら炉へと進化して生産量を大幅に伸ばしていた。
このように「たたら製鉄」や「鍛冶」にとって「鞴」は極めて重要で、後年これらの繁栄を祈願する祭りを「鞴まつり」と呼び、今も続いている。
江戸時代　紀伊国屋文左衛門が嵐をついて　江戸へ運んだみかんは江戸の鍛冶師たちの「鞴祭り」の供え物として必須のみかんであったと言われている。

踏み鞴と箱型炉の復元　　出土した踏み鞴と箱型炉　8 世紀

3. 砂鉄の舞う浜　北泉浜　　福島県原町市北泉海浜公園

北泉浜で　きらきら光る砂鉄

砂鉄の浜で　白砂が風に幾筋も舞う

発電所の正門のすぐ横は松林におおわれ、綺麗に整備された北泉海浜公園。
海岸にはきっと砂鉄があるはずと砂鉄を探しに行きましたが　本当に印象的な美しい白浜で黒い細かな砂鉄が白砂に混じって　実に綺麗な紋様を描いていました。

見渡す限り太平洋の中　荒波にもまれて沢山の若者が大きな波にサーフィンを楽しんでいる一方　誰もいない砂浜では、波にもまれた細かい砂鉄が 美しい砂鉄の風紋を作り、その上を細かい白砂が風によっていく筋も 流れて、家内と二人風の中に立って見とれていました。

4.　北泉浜で　浜砂鉄が描く模様

風 に 舞 う 砂 鉄 が 描 く 風 紋

5.　「Iron Road 鉄の道」

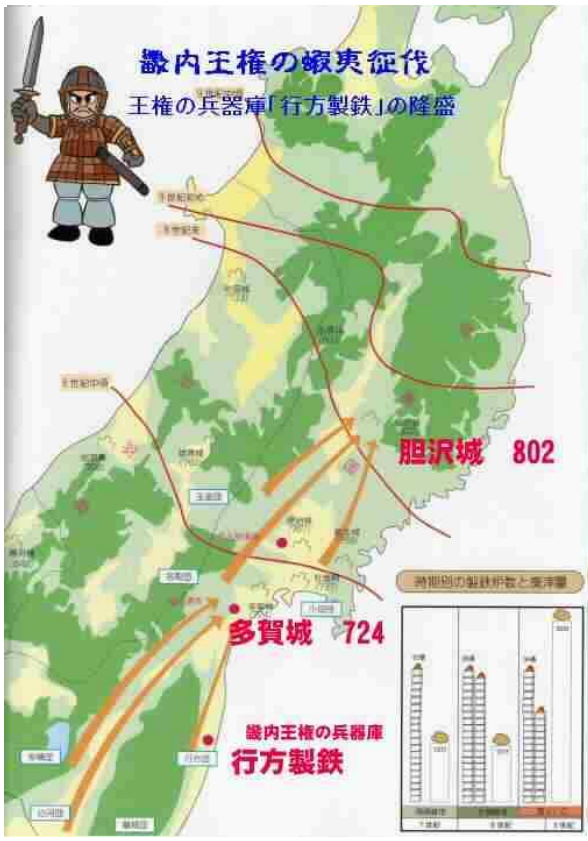
7 世紀から 8 世紀東北にあった蝦夷国・出羽国・津軽国　畿内王権の蝦夷地征伐で次々と畿内王権に組入れられ、日本国が誕生した。
これらの国には　恐らく北のまほろば　三内丸山遺跡・亀が岡文化などに代表される縄文人やオホーツクの民の血が濃く流れていたに違いない。
これらの国と弥生人の血を色濃く持つ畿内王権とが出会いそして日本国の完成へ。
戦いに使われた蝦夷の刀は日本刀の原型となった「蕨手刀」。それが原型となって刀は突く武器から切る武器へと変身し、戦いの主力武器へ。
この蝦夷と畿内大和政権との戦いの武器調達を担った鍛冶の主力が、この金沢の製鉄遺跡。
ここでも　「Iron Road・鉄の道」が歴史の重要な転換点の役割を演じ、出会いを演出している。
この日本誕生に役割を演じ、縄文と弥生人融合を演出した浜の砂鉄を紙にさっと包んでポケットに入れ、この浜を後にした。
私にとっては　空白だった鹿島・房総から三陸海岸の間の部分　阿武隈山地・陸奥のたたら遺跡との最初の出会いなった。
原町は相馬馬追いで有名な町であるが、日本誕生に関わった製鉄の重要な町でも有る。

真金吹く　陸奥の行方　福島県原町市金沢　真吹郷
「真金吹く丹生の真朱の色に出て 言はなくのみそ吾が恋ふらくは」

1999.11.13. 福島県原町市　北泉海岸・金沢地区製鉄遺跡にて

4.2.　日高見(北上)の鬼　「蝦夷（エミシ）の雄 アテルイ」

佐藤清忠氏著　「ヒタカミの鬼アテルイと田村麻呂」より抜粋
http://yositsune.ichinoseki.ac.jp/SATOK/pr/ezo/oni.htm
1999.11.27.採取
htkmi.htm by Mutsuo Nakanishi



東北電力　原町発電所発行「真金吹く陸奥の行方」より

「 それ以前にも、紀古佐美（きのこさみ）率いる約5万朝廷軍をわずか千数百の兵で打ち破り、遁走を余儀なくしたこともあった蝦夷の雄　アルテイ
774年から38年間続いた蝦夷征伐戦争で、前沢・衣川付近でひと頃は約10万の田村麻呂率いる朝廷軍の侵入を迎えた。
日本を二分した畿内政権と蝦夷との戦いの戦場が日高見（北上）一関から始まった。
8世紀末の10万の大軍が、胆沢平野へとなだれこんできたのだが、胆沢の巨星、アテルイはひるまず、戦い大軍を翻弄した
しかし 801 年、初老の域に達したアテルイは、朝廷軍が現水沢市に造った胆沢城（後の鎮守府）を目の当たりにし、田村麻呂に最後まで残った 500 の兵を連れて降伏し、都に連れてこられた。
朝廷はこの天才指揮官らを田村麻呂必死の懇願に関わらず斬首してしまった。
みちのく民衆のこころ、怨念の歴史は、この時から始まった。
さまざまな伝説が生まれ、今日までも、奥浄瑠璃や祭 の形で語り継がれてきた。

佐藤清忠氏　「ヒタカミの鬼−アテルイと田村麻呂」より抜粋

畿内政権が行方(現在の福島県原町市)に大規模な製鉄所を持ち大量の武器の製造を行っていたが、対抗する蝦夷国も日本刀の原型になった蕨手刀（わらびてとう）の量産技術をもっていた。
憶測では、渤海など大陸との交易や出羽や津軽との交流により、採鉱、燃料調達、製鉄の技術を持っていたものと推定される。
目立った戦争経験がない蝦夷国が朝廷の十分の一以下の兵力で抵抗でき、民の心を結集できたのだろう。

畿内政権と戦った蝦夷国アテルイの武器
蕨手刀の分布

4.3.　8世紀 紀元724 蝦夷と戦った

畿内王権の前線基地　「多 賀 城 遺　跡」

2000.1.20. tgjyo.htm by M.Nakanishi

多賀城は仙台平野の東北端に位置し、海抜 4m の低地から 50m を越す丘陵地まで起伏に富んだ地域を占めている。
周囲は約 900m 四方の不整方形に土塀や柵木列がめぐり、その中央に約 100m 四方の政庁がある。 その周辺には多くの役所や兵氏の住居などがある。
佐倉歴史民俗博物館にかざられたこの復元模型は 780 年の伊治公呰麻呂の乱で焼失後に復興された平安初期の姿を示している。

4.　7世紀　畿内王権の蝦夷征伐の兵器庫
「行方製鉄」遺跡を訪ねる
【完】